

平成二十一年二月一日発行（毎月1回1日発行）通巻八三〇号
昭和二十五年四月三日第三種郵便物認可

火星

平成二十一年三月号



七曜抄 (六)

山尾玉藻

鎌倉へ行きたき梅の咲きにけり

何か眩き紅梅を離れたる

白梅になく紅梅に床几あり

風つよき辛夷の山の裾ゆけり

うすべりに楽人揃ひかげろへる

松葉杖椿の夜をたづねきし

エキストラに弁当とどく桜かな

山祇に連翹は黄を張りとほし

ケーブルの山へ戻つてゆく日永

閻王堂裏のじやがたら花ざかり

太白星

柳生千枝子

新年の夜となる月の象牙色
寂しさを拭へぬ望の月のいろ
新ら年の独りの月を仰ぎをり
初夢を見たる寝覚めの脚のぼす
初夢に佳き人ありぬ深吐息
初夢を覚ます陽ざしの中に覚め
おしやべりな雀来てをりお元日

杉浦典子

冬の雷空の厩舎を叩きたる
メタセコイア裸木となり忘らるる

金屏のうらに待たされぬる正坐
涸川の石に潮の香してゐたる
クリスマス馬術部員が藁反す
伝書鳩戻つてきたりクリスマス
臘梅の蕾かぞふる忌日かな

浜口高子

夕笹子テーブルクロスの糊利きし
極月の口開けて立つ紙袋
小浜湾に夜さり来てゐる白障子
きらきらと鳥の声過ぐ冬木立
良ろう弁べんの末と語りぬ冬の雁
雪暗や鉢に突つ立つ蟹の殻
潮騒に耳あづけぬる飾売

火星作品

山尾玉藻選

障子閉め海の暗さを感じをり
宝塚 河崎尚子

もどり来し部屋に海音お元日

枯枝を踏みしだく音男現る

寒晴や松くれなゐの脂たらし

大学に根を張つてゐる聖樹かな

師走空すずらん燈のふたつづつ
大和郡出 城 孝子

茶の花の蕊に幸せありさうな

かいつぶりクリスマスの燈くぐりたる

にはとりに青菜をきざむクリスマス

白鳥の首の直角雪くるか

この縁のここ母がりの餅筵
神戸 深澤 鱻

抄らぬ兄の雪吊よかりけり

逆波の遊ぶ舟屋の十二月

雪 催 箒 の 竹 の 柄 が 太 し
煤 逃 や 前 座 ば かり の 朝 座 に ゐ
臥 す 母 が 臘 梅 の 香 に 首 も た ぐ
天 び ん の 撓 り ゆ た か に 酢 茎 樽
薪 爆 ぜ る 音 の あ ち こ ち 大 根 焚
嵐 電 の 桜 枯 木 の 枝 に 触 る
散 り 紅 葉 除 け ば 苔 の に ほ ひ け り
バ ケ ッ ト に 烏 賊 墨 パ ン や 冬 至 く る
鶏 小 屋 の 鶏 出 払 へ る 年 の 暮
煤 逃 げ に 足 湯 日 和 の 駅 舎 か な
峪 風 の 大 つ ご も り の 丹 の 鳥 居
ま ほ る ば の 丹 の 橋 み ゆ る 雪 安 居
闇 汁 の 煮 え 立 つ 音 を す く ひ け り
潮 の 目 の す ぐ そ こ に あ る 冬 至 か な
裏 庭 の 鳥 入 れ か は る 枇 杷 の 花
湖 尻 へ 吹 き 寄 せ ら る 浮 寝 鳥
霜 枯 や 畑 の も の み な 美 し き

明石 戸栗末廣

八幡 飯塚糸子

宝塚 山本耀子

選のあとに

山尾 玉藻

障子閉め海の暗さを感じをり 河崎 尚子

俳句は存在の詩であり、存在を強力に訴える表現法に切れ字の「や」「かな」「けり」がある。それ以上に直截的な手法として「あり」「をり」がある。「あり」は時間的存在を示すが、「をり」の場合は空間的存在を示すと同時に人間論的と言えるかも知れない。

さて掲句、「障子」を挟んで暗い海と明るい部屋うちとで重層的空間を構築している。当然、読み手も「障子」の向うに広がる暗い海を感じる。しかし、それ以上に興味を抱くのは、「障子」を通して見えない海を意識する作者のこのころの内である。「をり」の断定が作者のこのころの呼掛けとして読み手にひびくからである。

師走空すずらん燈のふたつづつ 城 孝子

師走ともなれば辺りの様子がゆっくり眼を配ることも忘れがちとなる。作者もそんな慌しい思いでいたのであろうが、ふと仰いだ空に浮ぶ「すずらん燈」の穏かさに、このころ和む思いがしたのである。「すずらん燈」が灯り始めた夕暮どきであろう。

掛らぬ兄の雪吊よかりけり 深澤 鱧

作者の故郷は豪雪で知られる新潟である。久し振りの帰郷で、兄上の雪吊の作業を眺めておられるのである。四苦八苦される兄上の様子を「よかりけり」と楽しんでる所に、作者の兄上に対する深い慈愛が窺え、読む者もほのぼのとした気分になる。

臥す母が臘梅の香に首もたぐ 山本 耀子

梅の花の香には清澄な気品が感じられるが、臘梅の香はやや重たげでどことなく慇懃に漂う。病床にある作者の母上も、ふとその特有の香に気付かれたのであろう。「首もたぐ」のやや重くれた表現で、臘梅の香をねんごろに聞き止めようとする病人らしい仕草を巧みに捉えている。

鶏小屋の鶏出払へる年の暮 飯塚 糸子

「年の暮」が廻ってきたところで、「鶏」には何ら関りのないことである。しかし掲句に描き出された景から、「鶏」が何やら年内に片付けねばならぬ所用で出掛けているように感じられて面白い。彼らはのんびりと日向の草でも突つきに出ているのであろうが。

潮の目のすぐそこにある冬至かな 戸栗 末廣

字の意味合いとは異なり、「冬至」には穏かな趣がある。太陽の高度が一年中で最も低く、日差しにも安らかさが感じられ所為であろう。作者が近くに望む「潮の目」も緩やかな曲線を描いているのだらう。しかしこの安穩な景の何処かに、これからの厳しい冬の兆しが潜んでいるようであり、この点もまた季語「冬至」の本意なのである。(以下略)

恒星圈

戸栗末廣

回廊の奥へ奥へと冬紅葉
冬遍路の先頭あとを振り向かず
大樫の枝つぶさなる冬構
日だまりに自転車倒し冬菜畑
頼りなき日差しのポインセチアかな

高松由利子

戸田春月

枳席へ総見の足袋上がりけり
曳売のからで戻りし石露の花
月明に鱒吊りし塗師の軒
雪すべる音のありたる能登瓦
とろ箱の蟹が宙搔く雪催

ぶさいくな冬至南瓜飾りけり
越前の厨もろとも煮凝れる
葭鴨に混じらぬ鷺のうなじかな
単線の模型走らす冬座敷
狐火や湯殿の天井しづくして

田中みのる

野澤あき

夢を見る真白き部屋に室の花
看護士の眼ざしぬくし童の玉
胃カメラに大腸カメラ四温かな
冬風や点滴の針はづさるる
退院てふ降誕祭のプレゼント

大忘れしたるごとくに年を越す
メールボックスより葉付き柚子一つ
バスデーケーキふた息に消す大晦日
極月や壁の向うをヒール過ぐ
子の家へ海見ゆる席初しぐれ

獅子座

山尾玉藻推薦

渡辺数子

大年の古着屋夫婦しづかなり
一枚をめぐつて見せし曆売
飴届く自治会館の掃納
細工師の音のつづきぬ冬の月

助口弘子

夫なくて焼薯の笛通りすぐ
雑炊の湯気の向うに夫あるや
刃物屋の古りし看板年の暮
戸隠の三本杉に冬の鶉

高橋芳子

お降りとなりきし夫の大根畑
凍星へ肉一塊を吊しけり
名水は間欠なりし桜の芽
輝の手に撫でられしひよんの笛

藤原冬人

冬銀河見ゆる厨に米研げる
鴨ひと群増えてをりけり風の沼
冬霧の向うがはより鳥の群
求職の青年椅子に着膨れて

竹内水穂

河豚の鰭並べ干しある夜の新地
大綿やしまひつつ売る古本屋
干大根潜りて入る紅格子
みどり濃き大みささぎの鴨の陣

白数康弘

天橋に潮満ちくる大旦
切り口の濡れたるままの年木かな
早や大き足跡のあるふくさ藁
まづ竹の枝を払ひぬ斧始

重見久子

マニキュアの指が鶴折る冬籠
近付けば干大根の木でありし
湯豆腐の急くこともなく浮いて来し
田煙の真つ直ぐに立つ蕪汁